第５次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物

The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

ムカシツチガエル

Glandirana reliquia Shimada, Matsui, Ogata et Miura, 2022

島田知彦（愛知教育大学）・松井正文（京都大学）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　爬虫類・両生類分科会

環境省 編

令和８（２０２６）年３月

特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：島田知彦・松井正文，2026．ムカシツチガエル．環境省（編）第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物，pp. 657-662.

Citation: Shimada, T. and M. Matsui, 2026. *Glandirana reliquia* Shimada, Matsui, Ogata et Miura, 2022. *In*: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 657-662.

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

ムカシツチガエル

***Glandirana reliquia* Shimada, Matsui, Ogata et Miura, 2022**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
各地で減少傾向にあると考えられるが、特に関東地方の低平地では極端に減少しており、二次的な分布の空白域が生じている。都県レベルでは、少なくとも東京都、千葉県、埼玉県で著しい分布の偏りが生じていることが報告されており（東京都，2023; 千葉県，2011; 埼玉県，2018）、その傾向は今後より悪化することが懸念される。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
水田の乾田化や水路のコンクリート化、河川やため池の人工護岸等の環境改変に加え、外来種のウシガエルによる捕食圧も大きな問題となっている。こうした生息環境の悪化は生息地全体で見られるが、特に関東地方の低平地では、生息に適した環境がほとんどなくなりつつある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種はもともと平地から低山地にかけてさまざまな水辺環境に生息していた種であったが、水田における乾田化や水路のコンクリート化、及び河川やため池における人工護岸等、様々な人為的な環境改変に伴って好適な生息環境が失われたことにより、特に平地において数を減らしつつある。また捕食性の外来種であるウシガエルによる捕食圧も深刻である。こうした減少傾向は分布域の中心に位置する関東平野において特に顕著であり、関東平野の低平地には二次的な分布の空白が生じている。

基礎情報

【形態】

ツチガエル属 *Glandirana* に属する中型のカエルで、頭胴長はメスで 31-54 mm、雄で 29-43 mm。体の背面は暗褐色または灰色がかった暗赤褐色で、不規則な黒い斑点を散布している。雄は単一の鳴嚢をもつ。体表は粒状の突起でおおわれ、胴と四肢の背面には多数の短い縦隆がある。腹面は円い顆粒で密におおわれる。成体の形態はツチガエル *Glandirana rugosa* とよく似ており、頭胴長に対するいくつかの計測値の比率が異なるのみである。幼生の形態も基本的にはツチガエルの幼生に類似しているが、ツチガエルの幼生では全身に皮膚腺が密生しているのに対し、本種の幼生では腹面に皮膚腺の密度が低い、あるいはほとんど見られない部分があることが特徴である。

【生活史】

5 月から 8 月下旬にかけて、水田、池沼、水路、枯渇した河床に残された水たまりなど様々な止水で繁殖するほか、ゆるやかな流れのある水域でも繁殖する。1 年間に複数回産卵する雌も存在する。卵は水田と幹線水路をつなぐ小水路のような、きわめて流れのゆるやかな浅い水域で、植物体に付着させて産み付けられる。栃木県市貝町の河川環境で得られた知見によれば、卵塊の密度は流速の影響を強く受けて決定されていた。繁殖期の終盤に産み付けられた卵から孵化した幼生は通常幼生越冬し、翌年に変態する。

【生息環境】

平野域から低山にかけて、都市の人工的な池から水田、河川、山地渓流、湿地まで様々な水域の近傍に広く生息する。ただし、圃場整備を受けた水田には見られない傾向が強い。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，河川上流域，河川中流域，ため池・池沼，湖・ダム湖 【陸域_平地部】田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，市街緑地，河川中流域，農業用水路，ため池・池沼
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

本種は、現在では東北地方東部から関東地方、中部地方の一部にかけて生息しているが、分子遺伝学的解析や性染色体の比較からは、かつては現在の分布域より広い地域に生息していたことが推測されている。特に本種と類似したミトコンドリア DNA 塩基配列が、佐渡島固有種のサドガエルや、九州南東部のツチガエルから見つかっていることから、本種の祖先種は北陸地方や九州地方を含む日本列島全域に生息していたことが推測され、後になって朝鮮半島から侵入したツチガエルの分布拡大を受け、一部のツチガエル集団と交雑しながら、分布域を狭めてきたと考えられている。ただし、これらのイベントは基本的には人為的影響でなく、有史以前の分布の変遷であると考えられており、本欄で記述すべき明治時代以降、都県レベルでの大きな分布域の変更は生じていないものと思われる。

一方で、都県内の地域レベルでは局所的な絶滅が生じたと考えられるケースが多々あり、例えば現在では大きな分布の空白地帯となっている関東平野の低平地にもかつては本

種と思われるカエルが広く生息していたことがわかっている（e.g. 埼玉県，2018; 千葉県，2011）。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在の分布は東北地方東部から関東地方、中部地方にかけての地域であるが、関東地方低平地の集団は極端に減少しており、二次的な分布の空白地帯となっている。以下、過去の研究等から生息地点として確認できる地点を市町村レベルで挙げる。東北地方東部：岩手県（奥州市、北上市、一関市、平泉町、遠野市、花巻市）・宮城県（南三陸町、仙台市、川崎町）・福島県（いわき市）、関東地方：茨城県（つくば市、常陸大宮市）・栃木県（市貝町、足利市、那須塩原市、宇都宮市、鹿沼市）・群馬県（渋川市、片品村）・埼玉県（小川町、東秩父村）・千葉県（茂原市、鴨川市、君津市、市原市）・東京都（あきる野市）・神奈川県（山北町、小田原市、相模原市、南足柄市、伊勢原市）、中部地方：山梨県（甲府市、上野原市）・長野県（中野市、山ノ内町、長野市、千曲市、上田市、東御市、小諸市、佐久市、松本市、塩尻市、白馬村、南牧村）。

【生息地の現況】

平野域から低山地にかけての地域に生息するカエルだが、既知の分布域のほとんどの都県で、域内の一部（多くは平野部）での減少が指摘されており、本種の記載前から「ツチガエル」として都県レッドリスト等で何らかの指定を受けているか（宮城県，2016; 茨城県，2016; 栃木県，2023; 群馬県，2022; 埼玉県，2018; 東京都，2023; 神奈川県，2006; 千葉県，2019; 長野県，2015）、本種の記載を受けて指定がなされた（福島県，2023; 岩手県，2024）。分布域のうち都県レベルでの絶滅危惧種としての指定を受けていないのは山梨県のみだが、同県についても県下の生息確認地が少なく、甲府盆地の中心部では生息が確認できないとの報告があり、やはり局所的な減少が生じている可能性が高い。

【個体数の現況】

本種が現在生息している地点では、しばしば高密度で多数の個体が観察されるが、そうした集団であっても近隣には同種の集団がまったく見られず、明らかに孤立した集団となっている例が少なくない。生活史を構成する環境要素が揃っていれば本来は高密度で集団を維持しやすい種なのであろうが、特定の環境要素が欠けると個体群を維持できなくなってしまうものと考えられる。おそらく現在でもそうした局所集団の逐次的消滅が進行している可能性が高く、高密度で生息している地点があるからと言って楽観はできない状況にある。

存続を脅かす要因

本種が生息する生息環境の代表的なものとして、水田・河川・ため池の各環境が挙げられるが、このうち水田環境に生息する集団は減少の一途をたどっている。特に圃場や水路の人工物護岸や田面の乾田化は、本種の成体の繁殖場所や幼生の生息場所・越冬場所の劣

化、消失をもたらし、圃場整備済水田では本種の生息は強く制限を受けることがわかっている。また、特に山間の水田では、耕作放棄による水田の消失も大きな問題となっている。

一方、河川環境ではまだ相当の個体群が残っているものと思われるが、こちらにおいても人工護岸によって岸辺や水面下の多孔空間が失われることにより、成体や幼生の生息場所・越冬場所が喪失していることが指摘されている。ため池環境も、人工護岸等で環境が悪化しているうえ、現在では外来捕食者のウシガエルが侵入している場合が多く、強い捕食圧を受けている。ウシガエルと共存している場合、本種の高密度な生息は望めず、本種の生息地点数を減らす大きな要因となっている可能性が高い。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，捕食（外来種による）
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，捕食（外来種による）

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義ツチガエル）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】情報不足,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【福島県】情報不足(DD),【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 芦澤航・大澤啓志・勝野武彦．2013. 谷戸におけるツチガエルの産卵場所選択．環境情報科学 学術研究論文集 27: 33‐36.
- Atobe, T., Y. Osada, H. Takeda, M. Kuroe, and T. Miyashita, 2014. Habitat connectivity and resident shared predators determine the impact of invasive bullfrogs on native frogs in farm ponds. Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences, 281: 20132621.
- 千葉県，2011．千葉県レッドデータブック―動物編（2011 年改訂版）．
- 千葉県，2019．千葉県レッドリスト動物編（2019 年改訂版）．
- 福島県，2023．ふくしまレッドリスト 2022 年版．
- 群馬県，2022．群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編（2022 年改訂版）動物レッドリスト．
- 茨城県，2016．茨城県版レッドリスト（動物編）2016 年改訂版．
- 岩手県，2024．岩手県における絶滅のおそれのある野生動植物のリスト（2024 年度）．
- 神奈川県， 2006．神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006．
- Matsushima, N., M. Hasegawa, and J. Nishihiro, 2022. Effects of landscape heterogeneity at multiple spatial scales on paddy field-breeding frogs in a large alluvial plain in Japan. Wetland Conservation, 106.
- 宮城県，2016．宮城県の希少な野生動植物―宮城県レッドリスト 2023 年版．
- 長野県，2015．長野県版レッドリスト（動物編）2015．
- 埼玉県、2018．埼玉県レッドデータブック動物編 2018（第 4 版）．
- Shimada, T., M. Matsui, M. Ogata, I. Miura, M. Tange, M. -S. Min, and K. Eto. 2022. Genetic and morphological variation analyses of *Glandirana rugosa* with description of a new species (Anura, Ranidae). Zootaxa 5174(1), 25–45.
- 栃木県，2013．栃木県版レッドリスト（第 4 次／2023 年版）．
- 東京都，2023．東京都レッドデータブック 2023―東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版．
- 宇賀神知則，1995．水田環境に生息するツチガエル（*Rana rugosa*）の分布を制限する要因．筑波大学環境科学研究科環境科学専攻修士論文．31p.
- 湯本光子，2018．山梨県における両生類の分布と生息適地評価．爬虫両棲類学会報，2018(1): 1‐13．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Glandirana reliquia has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Glandirana reliquia* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are

likely to continue. ①The number of individuals is decreasing. ②Habitat conditions are deteriorating.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Upper river basin, Middle river basin, Reservoir/Pond, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Urban green area, Middle river basin, Agricultural ditch, Reservoir/Pond
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Field preparation, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	—



©梨木之正

執筆者:	島田知彦（愛知教育大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Tomohiko Shimada and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月